勢ユルムヤウニ見ユレドモ、ヤガテ前ノ如ク盛ニナリ、其後ハ大陷胸ノ類ヲ用レドモ即時ニ吐出シ、次第ニ胸中ニ上冲シ、昏悶百苦シテ皆死ス、其迅速ナルコト、或三日或六七日ニ過ズ、京師ノ俗コレヲ三日坊ト名ク、予屢ソノ病ヲ診スルニ、其症結胸ニ似タレドモ、其脈結胸ノ脈ニ非ズ、皆浮虛或浮弱、或沈微沈細ニシテ力ナシ、因テ思フ、此症實ニ非ズシテ虛也、下劑ノ宜キ所ニ非ズ、全ク脚氣ノ一種ニテ、水毒急ニ胸中ニ上冲スル者也ト、

〔時還讀我書上〕文政庚辰〇三年春夏ノ際淫雨ヤマズ、ソレヨリ暑ヲ催ス頃マデ、乾霍亂ニ似テ心腹暴痛スル病人多シ、其證熱氣アリテ脈洪大、心下滿鞕、支痛スルコトモアリ、飲食下ラズ、大便秘結ス、因テ備急陷胸ナドニテ一下シテ、一旦ハヤヽ緩メドモ、却テ痛甚ク、熱候盛ニナリ、煩渴スルニ至ル、是ニ於テオモヘラク、此雨濕ノ氣、內ニ犯テ水毒ノ聚タルモノナラン、下スベキ證ナラズトシテ、增損理中丸料ニ蒼朮ヲ用テ白朮ニ代ヘ、水煎服セシメシニ、痛頓ニ減ジ不日ニ快復セリ、遂ニ十數人ヲ活シタリ、後ニ導水瑣言ヲ撿スルニ、京師ニ結胸證ニ似テ下劑ノ應ゼズ、外臺ノ桑白皮黑豆檳榔ノ方ニテ愈ル證行レシコトアリト云ヘリ、蓋一類ノ病ナリ、

〔天保集成絲綸錄百六〕天保八酉年四月

大目付江

時疫流行候節、此藥を用て、其煩をのがるべし、

一時疫には、大つぶなる黑大豆をよくいりて壹合、甘草壹匁、水に而せんじ出し、時々呑でよし、右醫證に出ル、

一時疫には、茗荷の根と葉をつきくだき、汁をとり、多く呑でよし、右肘後備救方に出ル、

一時疫には、牛房をつきくだき、汁を煮ぼり、茶碗半分づゝ二度飲て、其上茶の葉を一握ほど火にてよくあぶり、きいろになりたるとき、茶碗に水四盃入、二盃にせんじて一度飲て汗をかきて